



### カンボジアだより

#### その1 村が洪水に襲われました

アジア未来学校のあるアンロンコン・タマイ村は、大雨のため8月18日に村中水浸しになり、住民はアジア未来学校や村を囲む堤防の上に避難しました。このため、授業は中止に追い込まれました。現地NGOポンロック・タマイのディレクター、リティ氏はボートで村に入ったとのことでした。

ここはもともと低地で水が出やすく、村の周囲すべてを高さ2mほどの堤防で囲んで人が住めるようにした所です。2003年7月にはメコン河の氾濫でこの堤防が決壊し洪水に見舞われ、一カ月間授業ができませんでした。今回は連続した大雨で堤防の中に水が溜まり洪水になったものです。排水ポンプがないため、自然に水が引くのを待つ状態で、9月9日ようやくふだんの生活に戻ることができ、授業は11日から再開されました。

水の出た当日からリティ氏が現地に入り、当座の支援の必要性を探りましたが、幸いにしてけが人や病人の発生もなく、プノンペン市の対応もあり、当会の支援は必要ないとの判断でした。

#### その2 スラムの強制立退き

最近、プノンペン市内でスラムの強制立退きが活発に行われています。再開発事業が盛んになったため、公有地を私企業に売却するので、そこに住んでいる人たちが市の指定する土地に強制移住させられるという事態です。アンロンコン・タマイ村もそのハシリだったのですが、最近では、移住先が市の中心部から20～30kmも離れているので、都心でしか生活費を稼げないスラムの人たちはすぐに舞い戻ってしまうという悪循環を繰り返しています。また、立退きにはいくらかのお金が出て、移住先の土地も個人のものになるので、立退き情報をつかんでスラムに住み込んで立ち退き料をもらい、移住先の土地もすぐ売って現金を手にするという新手の商売も出てきているそうです。

こうした移住先では当然学校も作られておらず、今後当会の支援の対象となる可能性があります。上記のように人の移動が激しいので、村として落ち着くまでは手が出せる状況ではないようです。

(大澤)

～目	次～
カンボジアだより	1
総会・ワークショップ・会計報告	2
認定NPO法人申請延期	4
アジア文化会館秋祭り	
グローバルフェスタ2006	5
スタッフ紹介	
タイで出会う「現実感」	6
事務連絡	8

## 平成17年度年次総会報告(平成17年7月1日～平成18年6月30日)

9月23日、東京文京区のアジア文化会館にて当会の総会を開催しました。

活動会員総数29名中、出席者9名、事前表決者20名で総会は成立し、予定議事5項目はすべて承認され、総会は無事終了しました。なお、事務局長が松田啓志から細谷恭一郎に交代しました。

### ワークショップ「世界がもし100人の村だったら」

世界がもし100人の村だったら――

村人のうち、1人が大学の教育を受け2人がコンピューターを持っています。けれど14人は文字が読めません。

9.11同時多発テロの直後、全世界をめぐった「世界がもし100人の村だったら」。これをテーマにしたワークショップを9月23日の総会後に開催しました。国内で開発教育に長年取り組んできた開発教育協会（DEAR）のタスクチーム、DEAR-YOUTHの協力をいただいたの試みでした。当日は会員の皆様にくわえて17名もの外部からの参加者を迎える盛況ぶりで、日韓アジア基金の主催としては過去最大規模のイベントとなりました。

今後は日本国内へ向けたイベントを量も質も充実させていきたいと考えています。※ ワークショップ：参加者同士が主体的に共に1つのものを作り出していくこと

※ 開発教育：自分が社会の問題とつながりがあることを体験しながら学ぶ教育

以下、当日の様子を少し振り返ってみようと思います。

当日は、DEAR-YOUTHの2人がファシリテーター（舵取り役）をつとめた。

アイスブレイキングが終わるといよいよ本番！まず世界の多様性に目を向けることからアクティビティ（活動、ともに行う作業）がはじまる。

世界がもし100人の村だったら一本当にさまざまな人びとがいて、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア地域に広がっている。それを実感してみようというのだ。大陸の大きさを反映した縄の内側に入ってみる、世界のことばであいさつしてみる etc、頭でしか分かっていなかった世界中に広がる他者の存在を意識せずにはいられない。もちろん、識字のアクティビティも用意された。文字を読めないってどういうことなんだろう？日韓アジア基金が掲げる「カンボジアの子どもたちに教育を！」の標語を、世界に住む一員として改めて考え直す機会となった。

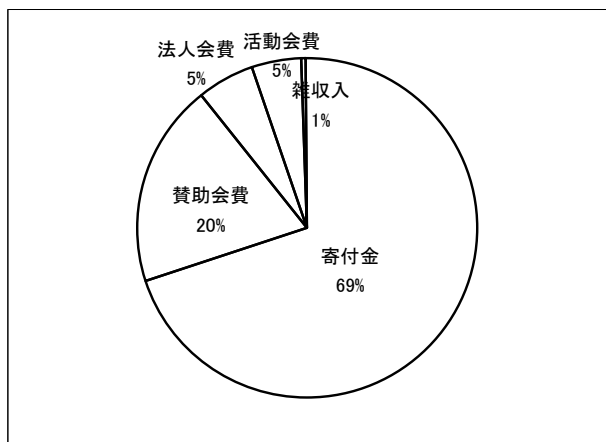
最後に、各自がアクティビティを振り返り、老若男女分け隔てなく考えたことを話し合う。見ればどの班もとても熱心だ。みんないま自分が置かれている立場と世界の現状を見つめなおしていたのかもしれない。このワークショップが何かのきっかけになればと思いつつ、発表に耳を傾けた。

（細谷）

# 平成17年度(平成17年7月1日～18年6月30日)会計報告

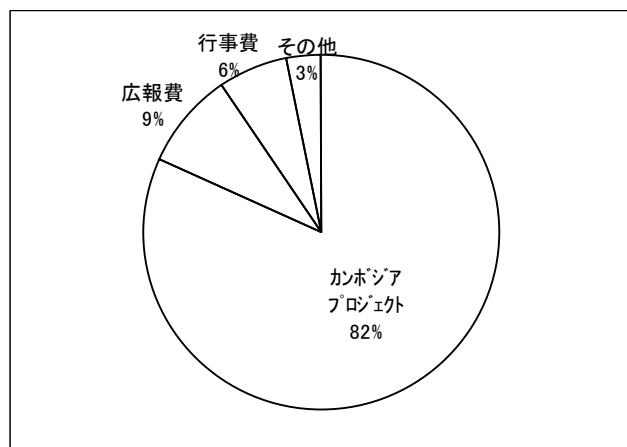
## 国内

収入構成(総額185万円)



収入は寄付と会費で成り立っており、補助金、助成金は受けておりません。

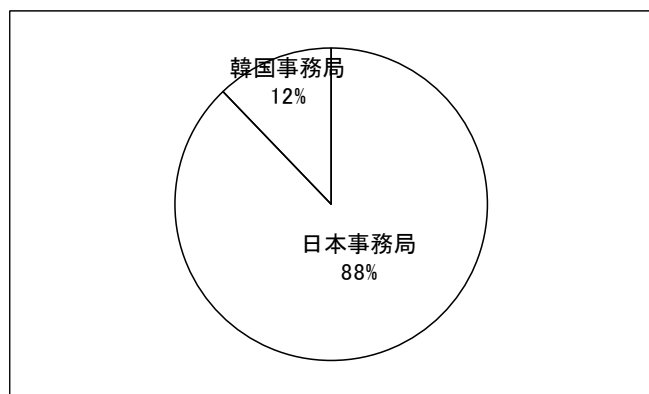
支出構成(総額202万円)



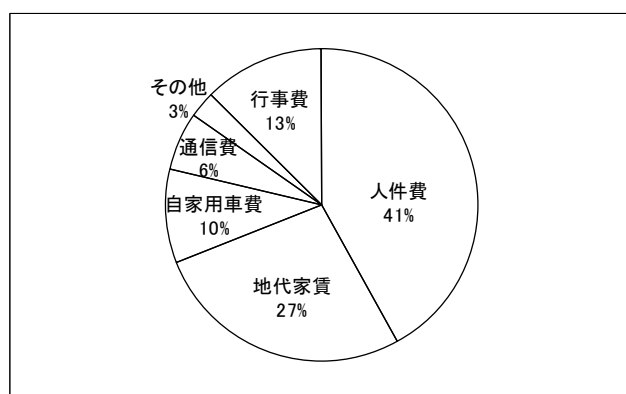
事業費(カンボジアプロジェクト・広報費・行事費)は全体の97%で、残り3%が管理費です。これは有給スタッフがいないこと、事務所家賃が無料であること、交通費等スタッフの個人経費がすべて自己負担であることによるものです。

## カンボジア

収入構成(総額13,847ドル)



支出構成(総額6,717ドル)



人件費：リティ氏及びアジア未来学校  
教員給与

地代家賃：ポンロック・タマイ事務所  
家賃

自家用車費：燃料代及び修理代

行事費：リティ氏日本出張費

## 認定NPO法人(税金優遇資格)申請を延期します。

本年1月のニュースレター16号で、表記の申請を7月に行い、早ければ11月に認定が得られる可能性があるところのご報告をしました。ところが東京国税局との事前相談の結果、下記事情により申請を来年7月以降に延期しなければならなくなりました。見通しを誤り、この事態にいたったこととお詫びいたします。

認定を取るためにクリアすべき条件は多岐にわたりますが、当会が引っ掛かるのは下記二項のいずれかです。この二つは二律背反の関係です。

- 1 特定の者が便益を受ける活動が事業費全体の50%以下であること。
- 2 寄附金・賛助会費合計の70%以上を事業費として消費していること。

1項については、現地団体に業務を委託している場合はこれを「特定の者」と見なすとのことです。当会の場合、国内事業費を除けばすべてポンロック・タマイにお金を送っていますので、上記比率は85%となり、こう見なされると完全に失格になります。便益を受けているのは現地の子供たちでポンロック・タマイではないのですが、この考えは国税庁には通用しませんでした。そこで、ポンロック・タマイは実質的には当会現地事務所であると主張すると、現地の先期末残高が大きく、事業に対する寄附金の消費割合は59%となって2項に引っ掛かり、いずれにせよ認定条件をクリアしないと判定されました。

現在、全国のNPO法人数は2万8千を超えていますが、認定資格を持つものはわずか48団体(0.2%)しかなく大変な狭き門となっています。当会は、今期新しいプロジェクトを立ち上げ、しっかりお金を使って、期末には認定条件をクリアしたいと考えています。

## アジア文化会館 インターナショナル秋祭りに参加



10月28日(土)、当基金が事務所を置かせていただいているアジア文化会館でインターナショナル秋祭りが開催されました。このイベントは、アジア文化会館に下宿しているアジアの留学生が、各国の料理の販売や、踊りの披露を通して、地域の方々との交流をはかるために毎年行なわれているものです。当基金もブースを出して、韓国茶(梅茶、柚子茶、ナツメ茶、しょうが茶)の無料サービスを行

ないました。今年は天候にも恵まれて、たくさんの方がブースを訪れて下さいました。わたしたちの活動に興味を持って下さった方も多く、有意義な一日にすることができたと思います。また、何度もブースを訪れては募金をしてくれた子どもたちがいて、とても励まされました。かれらの気持ちを無駄にしないように、これからも活動をがんばっていきたいです。(加納)



## グローバルフェスタ JAPAN2006 に出展しました！

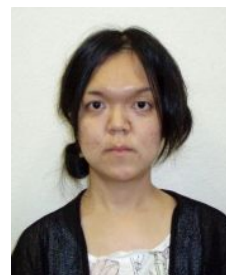
9月30日・10月1日 日比谷公園。今年も二日間にわたってグローバルフェスタが開催され、当基金は3回目の出展となりました！二日目はあいにくの雨模様でしたが、テントいっぱいカンボジアの子どもたちのポスターや写真を貼ったブースには、当基金に興味を持った多くの方がたが立ち寄ってくださいました。わたしたちの活動紹介を熱心に聞いていただけたことを大変嬉しく思います。今年パソコンを使用した当基金の活動紹介も行いました。今年グローバルフェスタへの来場者数は、一日目3万6千人、二日目3万1千人、合計6万7千人でした。グローバルフェスタとは？NGO・国際機関など、様々な分野における国際協力団体が参加する、国内最大級の国際協力活動を紹介するフェスティバルです。参加団体は約200にもなります。 (渡部)



### スタッフ紹介

#### 筑波大学社会学類1年 加納敦子

初めまして、こんにちは。今回新しくスタッフに参加した加納敦子です。私は外国に行ったことがないのですが、東南アジアの貧困問題や、日本が他のアジアの国と仲良くできていないことがとても気になっていました。何かできることがないかな、と考えていたときに、日韓アジア基金のことを同じ大学の先輩で、スタッフの細谷さんから聞き、興味を持ちました。



でも実は、私はボランティアや国際協力にあまり良いイメージを持っていませんでした。ボランティア、協力、ってきれいなイメージが強すぎて、マイナスの要素を見えなくしてしまうことが多いような気がしていたからです。でも、渡部さんに話を聞いたり、ニュースレターを読んだりしてみると、日韓アジア基金は、とても慎重に行動している団体であることがわかりました。ただ学校を建てるだけではなく、その後もアンケートを行ったりして、自分たちの行動に責任を持っていることが伝わってきました。

また、基金の創設者であるウさんの著書を読んで、とくに「ひとつのことを目指して、日本と韓国が協力すれば、きっと日韓の壁を超えて仲良くなれる」という考えに惹かれました。私も、何かを一緒に成し遂げたときに親友になれることが多いと感じていたので、ぜひこの団体に参加してみたいと思うようになりました。まだまだ勉強することばかりですが、とても楽しみです！これからよろしくをお願いします。

## タイで会おう「現実感」

細谷恭一郎

夏休みも終わりに近づいた8月中旬。バックパックにくたびれたTシャツ3枚とタオル、それに数冊の本だけを無造作に詰め込み、僕はシンガポールへ向け機上の人となった。到着は夜0時過ぎ。宿は決まっていない。

着陸し一步機外に出ると、あの独特の香辛料のにおいが出迎えてくれた。飛び交う英語に中国語。もはや看板にかな文字はない。いま、僕は東南アジアにやってきた。

旅に目的などない。行きたいから行く。

あえて理由を求めるならば、それは「現実感」という3文字に集約される。本やインターネットでどんな知識・情報も手に入る時代だけども、僕はそこに現実感を求めたい。理念ばかりを掲げて天下を論じるような人間にはなりたくない。

だから、移動は全て陸路にした。東南アジアを縦断するマレー鉄道である。

ユーラシア大陸の南東に位置するこの地域に、どんな人たちがどんな日々の生活を送っているんだろう。そんな好奇心に応えてくれる鉄道だった。書けと言われてれば何ページでもいけるのだが、ここではその北の終着点の1であるタイのチェンマイと、タイ西部の路線について書きたい。

### 【カレン族の村へ】

ある日の夕方、僕はカレン族の村に来ていた。チェンマイからのトレッキングツアーだ。象に乗って川を渡り、歩いて山を登った。東京生まれの東京育ちの僕としては信じられないくらい山奥である。草木をかきわけるようにして進んだその先に、その村はあった。

着いた瞬間眼前に開けた土地に、思わず目を見張る。斜面だ。ひらすら斜めだ。平らな場所がない。家屋は全部、竹を組んだ壁に葉っぱを重ねた屋根。「タンブルウ」(こんにちは or ありがとうの両用)と会釈しながら交わる人々はみんな民族衣装である。

期待していたとおりの衝撃が僕を襲った。でも、本当の衝撃はここからだった。

村を見て回ると、子どもがテレビゲームをしている。一体、電気はどこから来てるんだ？村を探索すると、なんとところどころに太陽光発電用のパネルが設置されている。さらに歩いていると気づくのは、タイヤの跡。そして、トヨタ製のトラック。こんな急斜面ばかりのところを車が走るというのか――。

そのとき僕は「山岳少数民族」という言葉から、彼らに自分たちと異なるものばかりを期待していたことに気づいた。それは結局自分の妄想を相手に押し付けていたにすぎない。

国際協力にボランティアとして携わり、さらに将来プロフェッショナルとしてやっ払いこうと希望する人間として、この事実は恥ずかしかった。他者に対する想像力の欠如という忌むべき事態を回避するには、こうして現場に身を置く試みを繰り返すしかないのだろう。考えにふけりつつ、山を下りた。

実はこのとき僕は風邪をひいてしまい、立っていることすら苦しい状態だった。このことで歩いて下山しなければならない、生活環境の厳しさも身をもって知ることになる。と同時に、ツアーガイドのタイ人、一緒に参加したアイルランド人・フランス人の気遣いがとても心に響いた。ありがとう。

## 【南下、そして西へ】

チェンマイに別れを告げ、再びバンコクへ。そこから向かうのは西だ。日本近代史と向き合う日韓アジア基金スタッフとして、いやそれ以前に一日本人として、タイにきた以上絶対に訪れなければならない。

泰緬鉄道をご存知だろうか。第二次世界大戦時、当時の帝国陸軍が補給線確保を目的としてタイとビルマを結ぶために建設した鉄道だ。現地人や東南アジア諸国からの労務者、英蘭の捕虜が動員され、莫大な人的被害を生んだ。「枕木1本に1人の割合で死んだ」（もちろん誇張だが）とすら言われる。

映画「戦場に架ける橋」の舞台となった鉄道である。

最初の目的地であるメモリアルミュージアムを出ると、線路が敷設されていたところへ案内される。今この部分に線路がないのは、ビルマ（ミャンマー）政府の意向で、国境付近からは線路が取り除かれているためだ。

なるほどよく見ると、ところどころに朽ち果てた木が転がっている。かつての枕木だろう。右手は岩石がむき出しになった崖がそびえ、左手にはすぐ急斜面がつづく。ちょうど今自分が立っているのは山を切りとおしたところなのだろう。さらに進むとヘルファイア・パスと言われる、巨大な岩をくりぬいたところへ出る。ミュージアムに飾ってあったあのモッコやツルハシで、この硬い岩を少しずつ少しずつ、削っていったのだ。おびただしい数の死者が出たのだろう、両脇には各国の国旗の名の下に慰霊がされていた。

こうした圧倒的「現実感」の前に、自分に何ができるのか。今は、全ての死者に哀悼の意を捧げることしかできない。でも、これからも過去から逃げず、世界の中の日本を考えて社会と向き合い、行動していきたいと思っている。

「死者」たちが作った泰緬鉄道を走る3等列車に揺られながら、この旅で出逢ったさまざまな物・人・歴史・文化 etc…に思いを馳せ、日本への帰路についたのだった。

**フリーマーケット商品送付のお願い**

ジュニアスタッフ有志

いつもご協力ありがとうございます。次回は11月に出店を予定しております。下記のものをごございましたらご協力ください。

未使用品：タオルセット・シーツ・カバー類

使用済みも可：冬物衣類(できればコート・上着類)・バッグ・雑貨小物

ご協力下さる方は、「フリーマーケット商品」と記入の上、以下までお送り下さい。

誠に申し訳ございませんが送料はご負担下さい。

〒156-0055 世田谷区船橋1-3-17 井内 和夫

電話 03-3429-8897

**06年7月～9月に会費・ご寄付を下さった方(敬称略・別枠を除き五十音順)**

荒川 雄彦	大澤 龍	菊池 礼乃	瀧口 利章	並木 陽子	古川 起與子	三藤 雅道	米田 容子
井内 和夫	河内 伸介	菊池 貞子	中島 智代	波多野 淑子	細谷 恭一郎	村松 悦子	李 香
江本 哲也	川崎 由紀子	栗田 瑞枝	中田 美智子	樋口 晴太郎	前島 盛一	八坂 涼子	若宮 康夫
遠藤 保弘	川辺 寛子	鋤柄 慎吾	中村 早苗	樋口 督水	松田 啓志	柳田 乃里	

株式会社 スリーエーネットワーク

**フリーマーケットの商品をご提供下さった方(敬称略・五十音順・10月4日現在)**

木村 由美 細川 敦子 松田 明美 吉田 恵美子

**ご入会・ご寄付のお願い**

活動会員：年会費 5,000円(学生、未成年者 2,000円)

賛助会員：年会費1口5,000円(学生、未成年者 1口2,000円)

法人会員：年会費 1口10万円

ご寄付：2,000円以上おいくらでも

<郵便振替口座>

口座 00180-2-25153

名義 日韓アジア基金

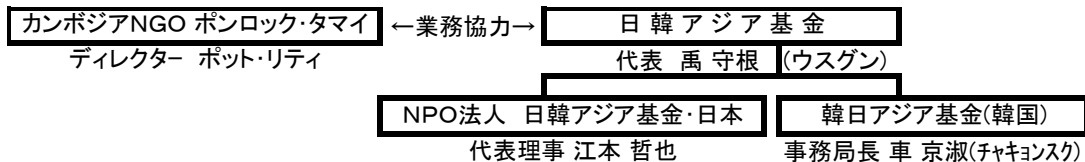
・活動会員：活動に積極的にご参加いただける方

・賛助会員：定期的にご支援いただける方

ご支援下さった方には「日韓アジア基金ニュースレター」をお届けいたします。

国内経費は全額スタッフ有志の寄付によっており、外部の方からのご支援は全てカンボジアに送っております。

**日韓アジア基金の組織**



<お問合せ先>

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-13 アジア文化会館(ABK)内

Tel:090-4456-2942(庶務・会計担当 大澤) FAX:03-3946-7599(ABK)

E-メール: iloveasia@ml-b7.infoseek.co.jp HP: http://www.iloveasiafund.com/japan/

発行人 特定非営利活動法人 日韓アジア基金・日本 代表理事 江本 哲也